

ハロー山梨創立20周年・ハロー山梨演劇塾YaYaYa第20回記念公演

京成金町線

エレジー 夜歌

テネシー・ウィリアムズ作

「欲望という名の電車」より

脚色・演出 藤谷清六

タイトル文字 山田 蒼岳
オブジェ 関根 悠一郎

2019年 10月5日(土)

昼/開場 13:30 開演 14:00

夜/開場 18:30 開演 19:00

2019年 10月6日(日)

昼/開場 13:30 開演 14:00

会場 甲府桜座

入場料/前売2,000円 当日2,500円(中・高生1,000円/小学生以下無料)

お問い合わせ/土井マチ子 :090-4932-8147 mail:kuninakadoi063@docomo.ne.jp

藤谷 清六 :090-3244-8006 mail:maki@mozidas.co.jp



「この時代のエレジーとは？」

ご存知のように、原作にあったのは、時代と価値観の変化、取り残され踏みにじられる女性、暴かれる性の問題、アメリカの光と影、すべてを飲み込もうとするエネルギーと滅び消えていく文化だった。

このヘビーな原作を、日本で今、芝居とする意図は何か？

京成金町線周辺の街、空気感はわかる。経済成長が幻となった現代、富から転がり落ちて、その夢から醒めきらない人々。この先の日本はもはや社会として共有できないのではないか、という感覚だけは巷にどんより漂っている。皆が信じた、経済成長による幸福な未来は、もはや存在しないのだ。道徳的価値観や、日本人固有とされる美しさへの共感も、あらゆる経済論理に巧みに織り込まれてきた。その機織り機は方向性を示せないものとなり、異質なものへの攻撃、仲間でないものの排除などで、かろうじて推進力を保とうとしている。こういう時代だからか？ 脚本家の危機感が、前世紀の危機感と重なったか？

時代の虚飾と空虚に絶望しかけている、あるいは対峙できないでいるブランチ（美咲）がたくさん存在している。大げさな表現や高笑い、一時の盛り上がりでは覆いつくせない空虚がある。外側で起きる様々な事件、政治の暴挙、分断化、世界で起きるたくさんの出来事に背を向け、個人の内側で美しさに耽溺しても、ありうるのはブランチ（美咲）の哀しい諦めだ。

「いつも、いつだって私の前には誰もいませんでしたわ」。ブランチ（美咲）の言葉だけが、説得力を増す。



山梨県立大学教授
坂本 玲子

「悲劇の真髓をわかりやすく」

この芝居の原作である「欲望という名の電車」（テネシー・ウィリアムズ）は演劇人なら一度は挑戦せずにはいられない魔力を備えているようです。

われらが清六さんも例外ではなく、早くも学生時代に某大学演劇部の公演を観てすっかり魅せられてしまったような。ただ生硬な翻訳の台詞に辟易、「いつの日にか必ず日本人によくわかるように脚色してやるぞ」と心に決めたのだそうな。

演劇界では杉村春子が1953年の初演以来600回近くもヒロインを演じたのをはじめ、岸田今日子、栗原小巻、大竹しのぶら演技派女優が相次いで挑戦しています。

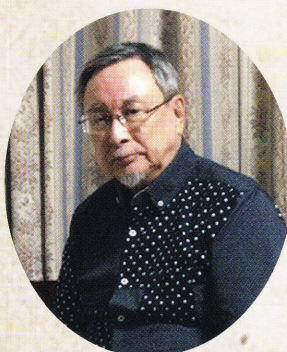
これほどの人気なら余程面白いストーリーに違いないとお思いでしょうが、とんでもない。お嬢様育ちのヒロインが身を持ち崩し、懸命にあがくが結局破滅してしまうという、暗く重苦しく救いのない一大悲劇なのです。あれから半世紀、清六さんは舞台を米国ニューオーリンズから東京下町に置き換えたこの「金町線エレジー」をついに完成させました。創作喜劇で通してきた清六さんも、老境に入った今この悲劇だけは上演しておかずにいられなかったのです。それだけに台本は、原作の筋立てを尊重しつつ、とてもわかりやすい台詞で原作の真髓を見事に表現することに成功しており、脚色の才能もなかなかのものだと感じました。



元読売新聞
モスクワ総支局長
浜崎 紘一

「海よたべないで」

藤谷清六氏が誕生するずっと昔、つまり山本眞樹氏の若い頃の話をしてしよう。彼と私の出合いは、同人雑誌の仲間から出た冗談半分の提案が瓢箪から駒になり、皆で演劇を始めようという話に。誰が脚本を書くのか？ということから突然、彼の登場になった。それが彼の「海よたべないで」という作品だった。都会から戻った兄と田舎暮らしの弟が乞食女を巡って起こす恋のトラブル。筋の明快さ、セリフのテンポの早さに感服。会場は東京九段の千代田公会堂。舞台装置は手作り、焦りとストレスから諍いが多くなり険悪なムードも漂った。山本と私が興奮のあまり、本気で殴り合うこともあった。山本は挫けそうになる皆を纏め、叱咤し、時にはジョークを飛ばし、稽古が終われば一杯やりながら、我々を支えてくれた。公演は大成功。こうして暑い夏は終わり、虚脱感が襲ってきた。新宿、渋谷、池袋、彼のアパートで頻りに飲んだ。この頃、彼はプロ劇団の演出部に籍を置き、私たちをちよくちよく赤ちょうちんへ誘い、酒を飲みながらじっくり世情を観察していたようである。やがて私は岩手県庁の役人となったが、彼も故郷に帰り家業を継ぎ、演劇から数十年離れた。そして還暦を期に彼は再びその世界に復帰した。彼はゴルフや演劇、酒を嗜むことにおいても一生懸命。以来58年、我々の絆は今なお繋がっている。万年青年だった彼も近頃は体調不良を訴えることが多いが、もうしばらく頑張って演劇というハレの非日常を作り続けて欲しいと願っている。



盛岡在住の朋友より
菅原 哲夫

「懐かしい景色」

今回の舞台の地が「京成金町線」と聞き、なぜか故郷に戻ってきたような思いに駆られました。生まれも育ちも浅草の私。東京の下町の住人の優しくも歯に衣を着せぬ物言い、雑草の如く生活力の強さ、周囲の人々への情の深さ等懐かしい限りです。昔の京成金町線の周りは低い屋根の住宅がひしめき、小さな町工場や飲食店が所狭しと立ち並んでいました。この舞台で登場する山梨のアップナーな環境で育った二人の姉妹。実家が没落してからのそれぞれの生活。その姉が妹の家庭に居候して巻き起こす様々な日常の中に・・・藤谷先生のピカリと光る人生のプラス、マイナス、次世代への命も含めた希望が脚本・演出に存分に生かされています。お稽古中、出演者の方々の役に対する努力と情熱も並々ならぬものを感じました。「京成金町線エレジー」は決して喜劇ではありません。悲劇の中のほんの少し明かりが差すグレイゾーンの世界。いつもながら登場人物がお酒を飲む場面が次々と出て来ます。酔ちくりんな私も好きなお酒を添えて皆様とご一緒に楽しみたいと思います。



薩摩琵琶奏者
清水 えみこ

「♪酒とバラの日々♪」



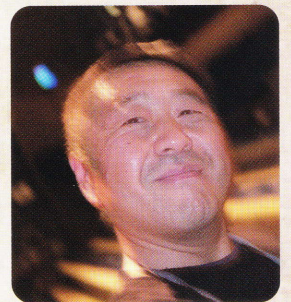
メイク担当
田中 来実

藤谷カンパニーの美術とメイクを担当していた、穏やかで笑顔が似合うある有名な画家に「私をアシスタントにしてください。」・・・と一方的に申し出たのが15年位前・・・私も若い頃は舞台に観入り、東京まで足を運んだ。本業以外で舞台美術に携われたら・・・と思っていたのでチャンスでした。それが藤谷氏の世界に足を踏み入れるキッカケになったとは、今思うと、随分奇妙な気がしてならない。無我夢中で舞台メイクを楽しみ、指摘され、悩み、走り回ってメイクの材料を探した思い出も懐かしい。私の日常の仕事にも少なからず変化があり、益になっている事は否めない。さて、藤谷氏とは？未だに秘めたる事が大ありで・・・私としては現在も模索中・・・ただ言える事は、シャイで芝居に情熱を注ぎ、愛酒家で稽古の時は言いたい放題（これは当たり前です）藤谷氏曰く「飲酒これも亦、僕の仕事の一部といえるのでは・・・」と知っているに違いない。断っておきますが、とても静かに品性を保ち、紳士的に飲んでいるので救われます。また本人自身が書き下した原作・脚本・演出・経費まで。そんな大業を一人でやってのける舞台人は先ず山梨にはいないだろう。ましてプロの照明、大道具、音響、メイク、ヘアーまで駆使して・・・「♪酒とバラの日々♪」（ジャズのタイトル）ならぬ「酒と演劇の日々」と化して、藤谷氏は御年77歳とか？何と幸せな人生だろう。生涯現役でいて欲しいと願っている。

「諦めない清六さん」

明日の午後3時半までに、パンフレットの原稿を書いて欲しいと頼まれた。諦めない男からの依頼なのだから、僕は諦めるしかない。戦後の混乱期から高度成長期、バブル期を第一線で引っ張ってきた人のパワーは物凄い。何年かかろうが、周りがどう思おうが諦めない。まあしつこい。とても敵わない。本人曰く「遠慮の塊り」らしいがとてもそうは思えない。そうやって十数年続いている演劇公演が今年も開演する。時間をやり繰りしながら稽古に来る社会人の役者達に、諦めない男が演出を付ける。パワハラ、セクハラ、モラハラ etc. 昭和を全力で生きてきた男には、肩身の狭い時代かもしれないが、平成世代の人々と演劇を創っていく姿はとても面白い、謙虚な気持ちなんかじゃ出来ないし面白くも無い。年代なんか関係なく考えをぶつけ合って作品を創っていく。

いよいよ明日が公演日となる、まだ足りない、あと一週間あれば、もっともっと、と。毎回頭返される光景だ。諦めない男はまだ諦めない、明日来るお客様に喜んで貰える為に出来る事をギリギリまでしつこく考え試す。ここで僕は、少しだけお手伝いをする。公演日、お客様に観ていただいて作品が完成する。締め切りが有るから作品が完成する。原稿の締め切り時間も迫ってきた。以上が藤谷清六についての心象です。



舞台監督
鷹野 亮司

スタッフ

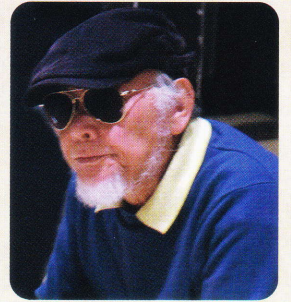
演出助手 / 島津久美子 舞台監督 / 鷹野 亮司 舞台監督助手 / 村松 裕美 照明 / 飯野 洋光

大道具 / 蘭 光 音源制作 / 塚田 仁 音響 / 望月 タダシ メイク / 田中 来実

ヘアメイク・衣装 / 小林 淑子 小道具 / HIRO ビデオ制作 / ツービッツ 宣伝・デザイン / 山中 みゆき
制作 / 土井 マチ子 松永 博美 プロデューサー / 山本 眞樹

「ごあいさつ」

私は、テネシー・ウィリアムズの『欲望という名の電車』の脚色をするにあたり、「今日の日本において、1940～50年代のアメリカ南部のお話を理解して頂くことはとても難しいと思いました。ですから、舞台を東京の下町京成金町線周辺にし、そこに住む労働者階級の1組の夫婦の小さな家に上流階級育ちの姉が食い詰めて転がり込むという設定にしました。我が国で名女優たちによって上演された『欲望という名の電車』の舞台を幾度か観劇致しましたが、いつも創られた不自然な作品だと感じていました。それを払拭して、現代の老若男女にもすっきりわかるようにと考えて脚色致しました。尚、本公演のプログラムに素晴らしい文章をお寄せ下さいました諸先生方に心より御礼申し上げます。そして、本日桜座にお越し下さいました皆様、誠にありがとうございました。どうぞ、ごゆっくりお楽しみ下さい。



脚色・演出
藤谷 清六

出演者の思い (50音順)



精神科医 安部 龍太

本日はご来場ありがとうございます。藤谷先生から、威厳ある医師の役があるので出演してくれと言われ、承諾はしたものの、改めて私には最も遠く難しい役と感じています。しかし、場面は少ないけれども、締め大事な部分。そして、抗えない運命を示唆する役目。その本来の使命に到達できないかもしれませんが、どうか温かい目でご鑑賞ください。

今日は、他の出演者の足を引っ張らないよう頑張ります。

北原美咲 伊藤 和美

美咲は、母親を亡くしてからは、大好きな父親が心の支えになっていました。時代の流れにのみ込まれてしまった美咲は、父親の為にゴルフ場を守ろうと必死でした。でも、その父親までも失ってしまいます。恋人も失い、転落人生を歩んでいきます。お風呂で体中に付いた人間の欲望と一緒に流した絶望の涙。歌声は、鎮魂歌。嘘や見栄を張ることで生きてこられたのではないのでしょうか。「いつも、いつだって、私の前には誰もいませんでしたわ。」私も踏ん張って舞台に立ちます。



池上小百合 上田 明日夏

婚約者の清二に浮気をされている女、そして、美咲を追い詰める女、池上小百合を演じます。婚約者の裏切りを知った時、彼女はどれほど打ちのめされ、悲しみ、苦しんだらうか。何故、清二を許すことができたのだろうか…。稽古を重ねていくうちに、自身の苦い記憶が蘇り、彼女の気持ちが心に突き刺さった。そして、彼女の行動を通して、過去の自分が救われた気がする。小百合を演じることが出来たのは、本当に幸せだったと思う。

隣の婦人 小澤 治子

憧れの桜座の舞台に立てるなんて！夢のようです。縁あって去年初めて芝居の世界へ足を踏み入れることになりました。今回私の役は隣のおばさん。粹も辛いもわかっているし、見たものでも「見なかったよ」と優しく安心させてやるおばさん。それでいて元気が良くて世話好きなおばさん。そんな愛すべき人物を演じられたらいいのですが。共演の皆さんの足を引っ張らないようにと思いながら精一杯頑張りたいと思います。

